

乳がん情報共有

日本人女性の11人に1人がかかるとされる乳がんについて、医師有志が情報共有を進める「一般社団法人乳がん情報ネットワークみやざき」（代表理事・駒木幹正プレストピア宮崎病院長）を設立した。医療技術の進歩により治療内容が多様化する中、県内で乳腺診療に取り組む医師が、他の診療科や医療機関との連携を強め、患者に最適な治療を提供する。

県内医師ら団体設立

最適治療へ連携強化

国立がん研究センターのがれぞれに最も適した治療を選ん統計手通では、国内で2015年に新たに乳がんと診断された患者は8万9400人も増え、同ネットワークによると、治療の選択肢が広がり、乳房再建で協力が必要な形成外科をはじめ、さまざまな診療科との連携強化が求められている。ただ、県内ではネットワーク化が十分には進んでいなかった。

初めでの活動となる特別講演会は同市のMR T m i c c であり、医療関係者約60人が来場。プレストピア宮崎病院

15日に発足し、25日には特別講演会を宮崎市内で開き、本格始動した。主な活動は、医療関係者の情報共有の場や患者向けの相談窓口を設ける情報提供への診療科とのネットワークをつくる「医療連携の推進」講演会や交流会などを通じた「診療技術の向上」。

理事は駒木代表理事と高崎大医学部付属病院の鮫島浩病院長、県立宮崎病院の大夫直樹外科医長ら7人が就任。事務局は乳腺専門病院のプレストピア宮崎病院（同市丸山2丁目）に置く。

今後は医療機関や診療科を問わず医師や看護師、薬剤師らを講演会などの活動に呼び込み、連絡リストを作成する。なとして、口消に情報交換できる態勢を構築する。患者

特別講演会で乳がん診療への理解を深める医療関係者＝25日午後、宮崎市・MR T m i c c



の柏葉匡高副院長らによる薬物療法の意味などをテーマにした話に耳を傾け、理解を深めた。

小さなネットワークだが、県内全域に神経のように張り巡らせた話に耳を傾け、理解を深めた。患者や女性を支援してきた」と話している。

（豊野健太）